

〔特産化を目指したカキ新品種の栽培指針確立〕

カキ‘東京紅’の果皮色に基づく収穫適期判断

菊池知古・近藤 健・矢沢宏太^a

(生産技術科)^a 江戸川分場

【要 約】カキ‘東京紅’は、果皮色 cc 8 で収穫することにより、特徴である朱色、高い糖度を呈することができる。また、日持ちも低下しないことから、果頂部の果皮色 cc 8 を収穫適期の判断基準とできる。

【目 的】

当センター育成の新品種‘東京紅’は、カキに対する新たな需要を喚起できる有望品種である。しかし‘東京紅’の普及・定着に際して不可欠な栽培指針は未確立であり、他品種の事例準用で対応しているのが現状である。今後、直売所で販売されることを想定し、収穫適期を判断する果皮色を決定し、その理由を明らかにした。

【方 法】

場内灰色低地土圃場の‘東京紅’6 樹を用いた。受粉樹は場内の‘禅寺丸’とし、放任受粉とした。収穫は、果頂部が農林水産省果樹試験場基準カキ果実カラーチャート（以後 cc）値で 2005 年は 7.0, 7.5, 8.0 の時、2006 年は 6.0, 7.0, 8.0 の時とした。果実品質などの調査方法は、全て落葉果樹系統適応性検定試験調査方法に準じた。日持ちは、室温（25℃）に放置し、硬度が約 1 kg/cm²になるまでの日数とした。

【成果の概要】

- 1) 収穫日を見ると、年次により収穫時の果皮色により差が無い場合(2005)と、開花から収穫までの日数が、cc 6 と cc 7 では 5 日、cc 6 と cc 8 では 14 日多くなり、収穫期が約 2 週間遅れる場合(2006)が認められた（表 1・表 2）。
- 2) 一果重は、年次にかかわらず収穫日が遅くなるほど重くなる傾向があり、開花から収穫までの日数が多くなるほど重くなっていた（2006）（表 1・表 2）。
- 3) 糖度は、年次にかかわらず収穫時の果皮の着色が進行しているほど高くなる傾向があり、2006 年の cc 6 と cc 8 では有意に差があった（表 1・表 2）。
- 4) 硬度は、年次にかかわらず収穫時の果皮色による差は殆ど無かった。2005 年はむしろ cc 7 よりも cc 8 で、硬度が有意に高かった（表 1・表 2）。
- 5) 日持ちは、収穫時の果皮色による差は無かった（表 2）。
- 6) また、同時期に出回る‘次郎（糖度 16~17）’の糖度を上回る果実の割合を見ると、年次により多少異なるが、果皮色 cc 8 で収穫した果実では約 7 割が‘次郎’を上回った（図 1・図 2）。
- 7) 以上の結果から、果頂部の果皮色が cc 8 になるまで収穫を待つ場合は、甘柿である‘次郎’が多く出回る時期（当センター‘次郎’収穫開始は 2005 年は 11/15, 2006 年は 10/23）に重なる可能性があるが、糖度が‘次郎’を上回ることから、視覚（朱色）、味覚（糖度）の両面から‘東京紅’の特徴を生かすことができる。日持ちも低下しないことから、果頂部の果皮色 cc 8 を収穫適期の判断基準とできる。

表1 収穫時の果皮色と果実品質 (2005年)

果皮色 (cc 値)	開花～収穫 (日数)	収穫日盛 (月/日)	一果重 (g)	糖度 (Brix%)	硬度 (kg/cm ²)	日持ち (日)
7	—	11/9	261	16.5	2.1b	—
7.5	—	11/9	269	16.9	2.1ab	—
8	—	11/11	274	17.1	2.2a	—

表中の異なるアルファベット間には5%水準で有意差あり (Tukey のHSDによる)

表2 収穫時の果皮色と果実品質 (2006年)

果皮色 (cc 値)	開花～収穫 (日数)	収穫日盛 (月/日)	一果重 (g)	糖度 (Brix%)	硬度 (kg/cm ²)	日持ち (日)
6	142	10/16	260	16.6b	2.4	21
7	147	10/23	274	17.2ab	2.3	22
8	156	10/30	270	17.5a	1.9	21

表中の異なるアルファベット間には5%水準で有意差あり (Tukey のHSDによる)

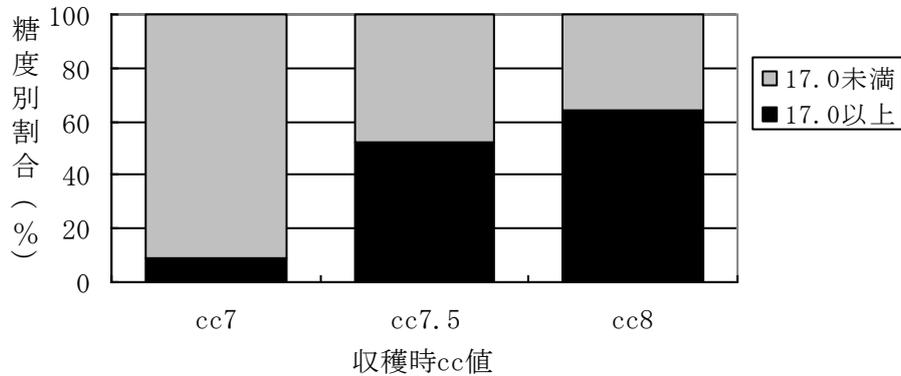


図1 収穫時の果頂部果皮色の違いと糖度の関係(2005年)

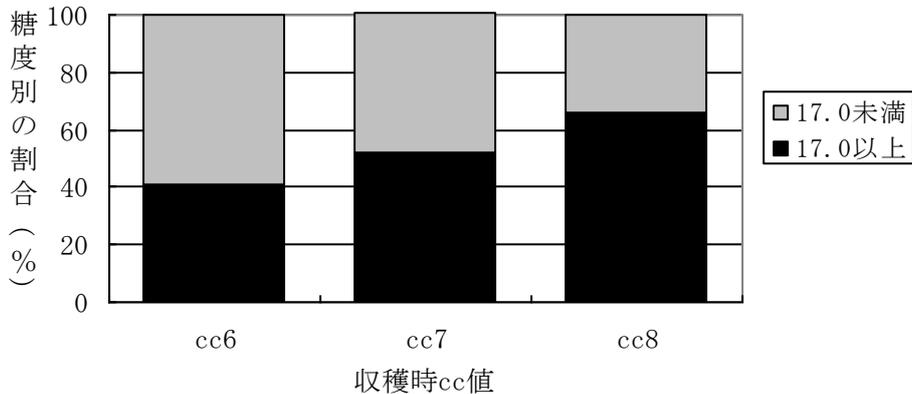


図2 収穫時の果頂部果皮色の違いと糖度の関係(2006年)